

Title	組織概念としての商業
Sub Title	
Author	向井, 鹿松
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.3 (1923. 3) ,p.313(1)- 342(30)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230301-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

作アラルト・エ
譯 二 禮 田 黒

代表表現派轉變

獨逸表現派の奇才エルンスト・トルラーは革命的な情熱と豊かな詩想を持つ天才である。歐洲大戦が齎した惨害を痛感した彼が戦争を呪ひ、軍國主義を否定して、自由と平和と世界同胞の理想に燃ゆる社會革命劇がこの戯曲「轉變」である。表現派の代表戯曲として全歐洲に謳はれたこの傑作は黒田氏の麗筆によつて邦譯され、美装を凝して出た。表現派の藝術を知らんとする者の必讀の好著である。

最新刊
菊原泰一
半價一圓
裝新裝
錢十三

獨 在
著 二 禮 田 黒

蝙蝠日記

新しい革命獨逸の苦悶と愛憎と希望とをこのやうに生々と描き得た通信は世に現はれてゐない。表面的な政治的事實に捕はれたり、數字を無意味に羅列したり、新しいことでも價値のない事實を仰々しく述べて得意がつてゐるのは違つて、著者の深刻な社會心理的觀察と流麗な藝術家的取扱ひとを以て紹介された獨逸は懐しく生動してゐる。「解放」誌上に連載して湖の如き歡迎を受けた本書は出た。

最新刊
菊原泰一
半價一圓
裝新裝
錢十三

東京市神田区今川路大 振替 閣 燈 大
電話 三三三六 八 一 六 三 三 三 京 東
大阪市南區 電話 五五二七 一 五 五 一 七 二 阪 大
三〇八一 南 阪 大

三田學會雜誌 第十七卷 第三號

論 說

組織概念としての商業

向井 鹿 松

商業なる概念は一つの歴史的範疇に屬するもので必竟社會の經濟組織及經過の發達に伴つて其意義亦自ら異ならざるを得ないものである。而して近世に於ける商業の概念に付ては從來既に經濟學者の間に定説の存して動かす可からざるものがあつた。(一)然るに二十世紀になつて經濟組織及び經過の甚だしく進歩發達した結果と、一は國民經濟的組織及び其發展傾向に對する研究及び洞察の深

くなつた爲めに従來の商業の本質又は定義に關する舊説は今や吾人の學術的欲求を充たすことが出来なくなつて來た。茲に於てか數年前から商業の意義に關する新説を唱ふる者が漸く學者の間に出るやうになつた。則ち本論文の目的とする所は、商業の定義に關する従來の學説と其經濟的背景とを説明し、而して、此定説の背景をなした經濟特に配給組織に今日大改造の行はれてゐる爲に今や従來の定義は之を支持することが出来ない。此爲に従來の商業の定義を棄て、新らしき概念を作るの必要あることを説かんとするものである。而して其間余は商業の概念が斯の如く變化して行くのは、自足經濟から交易經濟に移り、交易經濟の下に於て一方に分業が益々盛んに行はれる間に、他方には今日之と正反對の集中運動が起りつゝあるといふ此經濟的狀態に基因することを説明せんとするものである。

(註) Wörterbuch der Volkswirtschaft. 3 Aufl. S. 1232.

二

商業の定義を如何に定むるとしても、其本質が「財貨を人の間に分つこと」又は「財

貨の人的移轉」と云ふことを其の内容の内に持つてゐることは何人も否認することの出来ない事實である。此際吾人が若し各經濟單位の間に於ける財貨の移轉即ち交換と云ふことを頭の中に有するならば、人類の文化の進歩が猶自己經濟又は自己生産と云ふやうな階段に在る時には交換なる事實は存在しない、従つて商業と云ふことも在り得ないことである。蓋し自己經濟の下では其經濟單位に屬する人々の間に於て必要なものは皆其經濟内に於て生産せられるからして既に此點に於て交換と云ふ商業の本質中の一要件を缺くからである。

此故に動、もすれば世人が信ずるやうに商業は近隣者の間から始まつて遠心的に隔地者間に擴がつてゐたものではない。否事實は隔地者間から求心的に近隣者間に及んだものである。蓋し地を異にする者の間では各々生産條件を異にする結果、一種族の生産しない貨物を他の種族が生産するからである。茲に於てか地を異にする兩種族の間に掠奪、又は贈與の形式で財貨の移轉が行はれる。則ち自己生産の破れる第一階段である。更に又此等の土地を異にする兩種族は互に其境界又は其中間の何人にも屬しない地域で、鬭争又は交易の爲に集合

することになる。かくて此處で市場が発生する(一)

(一) 佛語の *marché* (市場) が *frontière* (國境) を云ふ意味の *marche* と同一の語原を有するのは面白い事實である。蓋し各種族の領地の境界で交易の行はれた結果に外ならぬ。今でも *Nouvelles Hébrides* 群島内の或る島では土人は其農産物を國境に持運び、此處で他の種族の土人の持ち来る貨物と交換することが行はれてゐる。(Cf. *Cours d'Economie politique*, 7^e édit., 1921. Voir la note de la page 370)

けれども交換と云ふ事實が社會經濟の上に於て重要な意義を有するに到つたのは中世都市と田舎との間に職業的分業が起つて以來のことである。職業的分業に従事するものは交換と云ふ社會的事實を前提として初めて安心にして之に従ふことを得るもので、交換なくして完全なる經濟生活を營むことは出来ないものである。茲に於てか都會は交換の場所となり、又定時に交換のために生産者及び消費者の集合する市場を生ずるやうになつた。此場合財貨と財貨と直接に交換するか、又は貨幣を以て購つたかは多く問ふことを要しない。要はかかる交換を惹起せしめた動因が交換の當事者自からの消費のためであつて、再賣却又は營利の目的でないことである。

つい十九世紀の初めに於てすら尚 *Nordshnen* では山地に住む住民が其處で織つた織物を携へて平原地に来て、此處で穀物、莢豆、罌粟、李、卵と交換するのが普通であつた。又 *Bosnien* と *Dalmatien* の兩地に住む住民間では穀物と葡萄酒が交換せられてゐた。(1)

斯の如く中世交換が初めて重要な社會經濟上の事實となつたこと、且つはかかる交換は多く消費者が自から消費のために直接に生産者について求め、外國貿易を除けば未だ再賣却のために購ふと云ふことが重大なる社會現象とならなかつた結果として、交換と商業が同一視せられるやうになつたのである。而して此觀念は比較的長く迄人の思考を支配してゐた。現に *Adam Smith* すら尙交換則ち商業と云ふ考を有してゐた。乃ち富國論に曰く、(2)

The great commerce of every civilized society, is that carried on between the inhabitants of the town and those of the country. It consists in the exchange of rude for manufactured produce, either immediately, or by the intervention of money, or of some sort of paper which represents money. The country supplies the town with the means of subsistence, and the materials of

manufacture. The town repays this supply by sending back a part of the manufactured produce to the inhabitants of the country.

Melon が其著 Essai politique sur le commerce (ed. Daire, page 667) に掲げた定義
Le commerce est l'échange du superflu pour le nécessaire. 及び Naples で經濟學教授の職
に在つた Genovesi が商業に與へた定義

“l'échange du superflu contre le nécessaire” も共に交換なる事實其物を以て商業と稱
した點に於て全く其規を一にしてゐるものである、且つ彼等の考へに依れば交換
は個人が充分の財貨を所有し此以上必要としない餘剰物のある時に起ることを
示してゐるものであつて Say が左記の書の註に此定義を批評する爲に示してゐ
る例よりも寧ろ主として直接交換の場合を頭に置いた定義を考へる方が至當
である。(三)(四)

(一) Schwiedland, Der Handel, S. 4.

(二) Adam Smith, Wealth of Nations, Book III ch. 1.

(三) Say, J. B., Traité d'Economie politique, page 61 et 92.

(四) Leroy-Beaulieu, Traité théorique et pratique d'Economie politique, 2e edit., Tome III p. 10.

此等の定義による時は商業たる爲には交換なる事實があれば足りる、交換が獨
立せる職業的分業となるを要しない故に亦商人たる職業の存在する必要はない。
又交換が繼續的に行はれる一つの統一的組織たることをも要しないのである。
故に農民が時に觸れ都會に出でて必要品を買入るるも亦商業である。蓋し是等
の見解は交換が重要な社會的事實とはなつて來ても、未だ以て交換其物を獨立
の職業とする事實が社會事實として重要な意義を有せざりし中世の經濟狀態
の内に生れた當然の結果である。

三

生産條件を異にする結果として生産物の相異を生じ、其爲めに交換なる事實は
先づ第一に場所を遠く隔ててゐる者の間から起つて來ることは既に述べた。從
つて亦單に折りに觸れ、必要に應じてなす交換でなくして、交換其物を職業とする
商人も先づ第一に隔地者間に於ける交換から先づ起つて來た。かかる意味から
して内國商業の存在せざる以前に既に外國商業が発生し、陸上商業の發生せざる

以前に先づ海上商業が發達したものである。(一)

(1) Gide, Cours d'Economie politique (7^e edit., 1921), Tome I, p. 370.

同じ國內に於ても前述べたやうに交換が社會現象をして重要な意義を有するに到つたのは都市と田舎の間に分業が行はれてから後のことである。其始めは彼等の交易の大分は彼等自からの生産物の剩餘で、之を其必要とする物品と交換してゐたのである。かかる交易は Leroy-Beaulieu も云へるやうに全く折に觸れ、本能的自然的に (occasionnelle ou instinctive) 起つてゐたものである。然るに分業が益發達するにつれて世人は最早自分の使用するものは自ら之を生産しないで之を他人に委し、自からは専ら又は主として他人の使用するものを作り、之を以て他人の生産し自己の欲する物と交換することが一般普通となつて來る。而して古とは全く反對で自分の生産するものの全部又は大部分は自から之を消費するに非ずして交換の目的となすこととなる。則ち偶發的、本能的の交換は茲に於てか意識的、系統的、規則的、永續的のものとなるのである。

交換が規則的、意識的、永續的とならざるを得ない際に生産者が生産の技術に没頭するの外尙且つ其生産物の販路の發見、賣却、包裝、發送、需要變遷の觀察、豫測等の商業的職分を擔當する時は其爲に甚だしき多くの時間と費用を費して、而も尙其効果は擧らないものである。消費者亦自己の欲する財貨を求むるに際して其生産者を發見して其欲する丈の分量を必要とする時に手に入れること困難であるからして此の爲に彼自らの生産又は其他の經濟又は社會的活動を阻止せられること蓋し鮮なくない。今若し或る一人が生産者より其生産物を買入れ更に此を消費者に賣却する換言すれば、賣却する爲に買ひ入れると云ふ行爲が發生するならばそれだけ生産者及び消費者の以上の財貨配給上に於ける心配苦勞は輕減せられる。従つて生産者は専心生産の技術に従事し、消費者亦特に消費貨物の種類、分量及び其買入れの時期に付て特に勞費を費すの煩が除かれるわけである。斯の如く生産と消費といふ此の二つの自然的事實の中間の於てかゝる交換の媒介といふ社會的事實が發生した際に、今又此の交換の仲介と云ふ行爲が更に進んで職業として繼續的に行はれる場合、換言すれば職業的分業として獨立した場合に、は生産者及び消費者の財貨配給上に於ける行爲は全然此の中間機關に委して、又

何等之に心苦を費やす必要がなくなるわけである。

以上述べたやうに生産者と消費者が自から直接交換をなさないので、(一)其間に消費者に賣却する爲めに生産者から買ひ入れると云ふ獨特の行爲が発生し、而して(二)此行爲が亦職業として継続的に行はれるに到つて、かの學者が交換則ち商業と云ふ定義も亦當然變はつて行かざるを得なかつたのである。則ち

J. B. Say は産業を農工商の三に分ち商業を左の如く定義してゐる。

Nous rangerons enfin dans l'industrie tous les travaux qui ont pour objet de revendre ce qu'on acheté, sans avoir fait subir à la marchandise aucune transformation essentielle, sauf le transport et la division par parties, afin que le consommateur puisse se procurer la quantité dont il a besoin, et dans le lieu où il lui est commode de la trouver. (1)

Say は商業を定義して買入れたるものを更に賣却するを目的とする凡ての労働と云つて、後世の佛國の經濟學者の如く特に之を職業(Profession)とすることを條件としなかつた。則ち此場合には生産者と消費者の間に財貨を配給する行爲で必ずしも之を獨立の營業として継続的に行ふの必要はない。只一回の行爲でも、

其行爲は商業である。けれどもこれは單一なる獨立の行爲で、前に述べた生産者又は消費者の交換行爲とは全然別個のものである。此爲めに生産者及び消費者の配給上に於ける負擔がそれ丈輕減せられるのは明かである。Grunzel氏が其著商業政策論に於て Wir erklären den Handel als jene wirtschaftliche Thätigkeit, welche die landwirtschaftliche und Gewerbliche Produktion dadurch ergänzt, dass sie deren Produkte durch räumliche und zeitliche Verteilung in den Konsum überführt. と云つたのは商業は財貨配給の行爲たれば足る、必ずしも之を業とすることを必要としない點に於て Say と同一の見解を採るものである。(1)(2)(3)

(1) Say, Cours Complet d'Economie politique, Tome I, p. 102.

(2) Grunzel, System der Handelspolitik, S. 4 f.

(3) Grunzel 氏が商業を斯く解したのは外國商業を顧慮したから來たものである。最近でも外國貿易を論ずるものは此の廣義に解するものがある。Hellner, System der Welt-handelslehre, Bd. I, I. Teil, S. 1.

けれども生産者より消費者に到る財貨配給の職分が只偶發的に第三者によつて行はれる丈では生産者及び消費者は常に安じて此第三者に依頼してゐると云

ふわけにゆかぬ。則ち前に述べたやうに此第三者が獨立の商人として常に規則的、永續者に此の職分を行ふことによつて、換言すれば之を業とすることによつて始めて配給に關する勞費は生産者及び消費者より全然除かれ、彼等は全く分業の法則に従ひて其専門とする所に安じて従事することの出来るものである。規則的、永續的組織的配給の機關なくして交易經濟組織の下に於ける生産者は只生産にのみ没頭することは出来ない。則ち再び賣却する目的で購入する行爲を營業として營む時に之を商業と稱すると云ふ説が出づる所以である。則ち

Leroy-Beaulieu 曰へ、

Le Commerce n'est que la systématisation de l'échange; c'est la transformation des actes occasionnels auxquels se livraient, avec grande difficulté, tous les membres de la société en une fonction, spéciale permanente, qui est dévouée à certains d'entre eux et qui absorbe toute ou presque toute l'activité de ces derniers. Le commerce fait profession de s'adonner uniquement ou principalement à la préparation et à la réalisation des échanges. (1)

(1) Leroy-Beaulieu, Traité théorique et pratique d'économie politique, Tome III p. 13.

斯の如く商業の概念を只營業として繼續的に行ふ財貨の買入れ及び之を賣却することに限るのは單に佛國の學者ばかりでなく獨逸では Mataja, Lexis, Roscher, Sondorfer 等大多數の學者の採用する所で今日の定説をなしてゐる所のものである。茲に於てか(一)直接交換の時代に於ける交換行爲、(二)又は賣却の目的を以て買入れる、單純なる行爲丈では足りない、(三)之を業として營むことによりて始めて商業であると云ふ説が出て來たのである。則ち行爲、概念としての商業から職業、概念としての商業に進んできたのである。一時的、偶發的の配給仲介行爲から繼續的、規則的、系統的人的の配給仲介行爲にと進んで來たものである。

四

資本主義以前に於ける農業や工業は營利とは離なれて之を經營し得る。彼等の活動の目的物は具體的財貨である。彼等は此具體的的目的物を發明し、發見し、之れを手にしせんが爲めに逢着する凡ての障害を防がんとして努力する。彼等の利害は常に遠慮ある物的の利害で且つ固定的のものである。然るに賣る爲めに買ふ商業の目的とする所は財貨に對する抽象的支配權、貨幣經濟の下に於ては此の

抽象的支配權の具體化たる貨幣の獲得である。則ち營利にある。商人はなる可く安く買入れて高く賣る打算と、此計算に基いて人と取引する爲めに活動してゐるものである。而して此の計算は常に變動して已まない市場關係を基礎とするものであるからして、商人の利害は常に變動的市場關係である。此の市場に於ける需要と供給及び景氣の變動を正當に測定し、豫測すること、而して此の計算に基いて取引し得ることは則ち營利として成功し又商人として成功する所である。茲に於てか營利は商業によりて最も早く社會的意義を有するに到つたもので、少なくとも賣る爲めに買ふ商業と營利とは歴史的に云へば不可分の關係を有してゐるものである。茲に於てか商業は營利行爲なりとの解釋が出づるのである。Philippovich 氏の如きは則ち商業を定義して次の如く述べてゐる。

Unter Handel verstehen wir jene Erwerbstätigkeit, welche nicht durch selbständige Produktion, sondern durch Kauf und Verkauf von Gütern, an welchen der Händler selbst kein wertschöpfendes Veränderung mehr vornimmt, einen Gewinn anstrebt. (1)

(1) Philippovich, Grundriss der Politischen Ökonomie, B. II, 2. Teil S. 127.

此外 Goldschmidt の商法全書に於ける定義 Handel ist die der Vermittlung des Güterumlaufes zugewandte Erwerbstätigkeit. 及び昨年十一月發行商事研究に於ける二宮教授の定義「賣買交換の方法に依つて生産と消費を連結する營利行爲」なりと云つてゐるのは、(一)商業を行爲概念と見ること、(二)營利なる事實に重きを置きたる點に於て其規を一にしてゐるものである。

若し營利行爲又は Erwerbstätigkeit と云ふ語を普通の解釋に従つて利潤を得るを目的とする行爲と解するならば、此等の説は利潤を得る點に甚だ重きを置いた點に於て後に述ぶる Lexis や、又 Mataja の商業の定義と亦同じである。けれども少なくとも近代の商業に定義を與ふに際して利潤とか營利とかを餘りに高調するのは正當ではない。蓋し資本主義的な社會に於ける大部分の生産其他の經濟行爲は皆營利、利潤獲得の目的で行はれてゐるものであるからである。只農業や工業は新らしき經濟財貨を作り出すことを手段として營利の目的を達せんとするに對して、商業は前二者の作り出した財貨を賣買するによりて營利の目的を達せんとするの差あるのみで、必竟異なる所は只其の手段の相違に過ぎないのである。

此故に此共通の目的なる營利又は利潤の獲得を以て商業を他と區別する特徴とすることは妥當でない。けれども従來の定説では利潤を得ること、營利の目的を有することが商業の一要件として加へられてゐる。則ち、

商業とは利潤を得る目的を以て財貨を買入れ又は交換によりて得、而して此の得たる財貨を更に賣却する行爲を營業とし行ふことと云ふにある。此の定義は Roscher, Lexis, Sondorfer, Mataja の諸學者の一樣に採用する所で實に今日迄の定説となつてゐる所のものである。而して此定義による時は商業たる爲めには次の三個の要素が含まれてゐるものである。

- 一、利潤を得る目的を以て、
- 二、獨立の營業として繼續的に
- 三、財貨を買入れ、又は交換により獲得し、之を加工することなくして之を更に賣却すること。

國民經濟の發達に伴ひて各經濟單位の間に分業が起こり生産者と消費者が分離し、此兩者を結合する必要上からして茲に獨立の商人が發生して、財貨配給の任

務を司つてゐた際に、商業を以上の如く定義するのは當然のことで何人も異論のない所であつた。けれども社會經濟の發展は滔々として已まない、舊組織を説明する爲めの概念が、何時迄も新組織の下に適用し得られるものでない、行爲概念としての商業が經濟發展の結果職業概念として商業に驅逐せられたやうに、職業概念としての商業が又新らしき概念に置き代へられなければならない時代の來るのは自然の経過である。然らば如何なる概念を以て之に代ふ可きか、是れ則ち余が研究の主題をなすものである。其準備として余は先づ以上の諸學者のやうに商業を私經濟的に觀察せないので、國民經濟上から其職分を論じた學者の説を搜がむて見る

五

商業が生産者と消費者の間に介在して、兩者のために用役 (Service) をなすことは既に古く Simondi が其の著 *Nouveaux principes d'Économie politique* Liv. II, ch. 8) に指摘した所である。斯の如く商業を以上述べた諸學者のやうに私經濟的に考察せな

いで明かに國民經濟的職分からして各種商業に共通の概念を得んと試みたのは

Van der Borch による。則ち曰く、

Aufgabe und Wirkung jeglichen Handels ist... die Überwindung der persönlichen, räumlichen und zeitlichen Trennung des Güterverbräuchers vom Gütererzeuger. (1)

(1) Handel u. Handelspolitik, S. 4.

此等の學者は何れも商業を國民經濟的に觀察したものである。思ふに職業的分業の行はれてゐる社會に於て生産者と消費者との間に存在する財貨配給上の場所的及び時間的懸隔を除去する機關の存在するを要することは社會生活上欠く可からざる所である。(二)而して從來國民經濟上に於ける此の職分を行つてゐたものは商人で、而して此の國民經濟上に於ける職分を行ふ彼等の精神は營利心で、其の目的は利潤であつた。然るに近時此の生産者より消費者に到る此配給上の職分を行ふに際し、更に此職分が益々分化し其分化したる各部職分が何れも皆一つの職業として營利の目的に供せられるやうになつた、茲に於てか生産者と消費者の距離は益々遠ざかるを得なくなつたのである。

(1) Ehrenberg は生産者と消費者との場所的間隔を除くを商業と云ひ、時間的間隔を

除くを投機であると云つてゐる。けれども實際に於て此の兩者は多くの場合結びついてゐるものである。結びついて居らない場合でも、又結びついてゐても之を思考の上に分ちて考へられる場合でも兩者は共に配給上の職分に屬するもので、其分たれた場合には此配給上の職分が益々專業的に分たれたものに過ぎないのである。

(Ehrenberg, Der Handel, S. 33.)

配給組織内に於て各種獨立の營利的分業を生じ、それぞれ配給に必要な職分を分擔することそれ自身は余の見解を以てすれば必ずしも配給の費用を高からしむるものではない。而も近時此のために消費者と生産者との距離の遠ざかるや、世人は物價の騰貴の原因を以て配給距離の延長に求めて、以て此の間に於ける獨立の配給仲間機關を除去し其距離を短縮せんとする運動が各方面から起つて來た。茲に於てか從來獨立の商人が營利の精神から經營してゐた國民經濟上の配給組織は一大變化を受くるに到つた。而して此の配給上に於ける獨立商人の地位を脅かさんとする運動はあらゆる方面から起つて來た就中其の主なるものが三種ある。則ち、(一)生産者の方面に於ける資本主義的集中運動、(二)消費者の方面に於ける社會主義的消費組合運動、(三)國家の方面に於ける社會政策的運動是で

ある。

けれども配給上に起つた此等の改造運動及び改造の組織及び状態を説明するのは本論の目的でない。本論文の主眼とする所は商業なる概念は歴史的範疇に属するもので、経済組織特に配給組織の進化に伴ひて變化す可きものである。而して商業なる語が経済の發展に伴ひて行爲概念から職業概念となつて來たやうに今又此の職業的概念たる商業も配給組織改造の結果更らに又他の新らしき概念の商業が生れなければならぬことを主張するにある。而して此の概念を余は組織に求めて商業は組織なりと解するものである。故に余は左に現代國民經濟の配給機關に如何なる變化が起つたか、従つて何故に從來の職業的營利的概念たる商業の定義を支持することが出來ないかを明かにする爲に主として資本主義的集中運動と消費組合運動から來る配給組織の改造を説明して豫定の紙數内にて本論の結論を急ぐこととする。

六

獨立せる商業に代位 (Handels-Ersetzung) せんとする傾向中現今最も廣く行はれて

あるものは所謂工業の商業化 (Kommerzialisierung der Industrie) といふ現象の中に表はれてあるものである。今日の工業は最早技術のみによつて經營することは出來ない、工業は常に市場の形勢變化によつて左右せられる、而して此の市場の形勢を觀察し其將來に於ける變化を豫測し其結果を工業に通達し技術を之に適應せしむるのは是れ商業家の任務である。更に又原料購入、生産の販賣又一に商業家の任務に俟たなければならぬので、茲に於てか現代の商業は或る意味に於て工業を支配する地位に立つものである。商業が工業に對しかかる重大なる地位を占むるが爲めに家内工業が工場工業となり、小經營が大經營となるに従ひ、或は又數個の生産階段を存する各經營を集中する場合には從來原料の購入、又製品の販賣のために工業の外にある獨立の商人及び各工業の間に於ける獨立の仲商を廢して工業自ら之れに代らんとする運動が盛んに行はれるに到つた。けれども此は獨立の商人を廢せんとするもので、從來彼等の行ひたる配給上の職分を廢するものではない。而して工業に於て此等の職分を行ふものは工場工業に於ける商業指揮者 (Der kaufmännische Leiter der Fabrikindustrie) で、其本來の工業的職分を行ふ技術

指揮者 (Technischer Leiter) は全く別個の職分を行ふものである。

此種の工業の商業化を最も早く實行したのは獨逸では電機工業で、其内でも特に先鞭をつけたのは Allgemeine-Elektrizitäts-Gesellschaft であつた。則ち從來此等の會社の製造品はこれを各地に於ける獨立の商業機關に委して注文の來るに應じて之を販賣し而して社會自からは敢て製造品の販路擴張の事に當らなかつた特に Siemens & Halske の如きは長く迄己を持すること高く、客に追従することを肯しとしなかつた。然るに此等の電機工業會社が其後自ら販路を得るの必要を覺知するに及んで全國の大都市に販賣の爲に自ら支店を設置して從來の獨立商人を除くに到つた。(一) けれどもこれは從來商人の行つた職分を除いたものではない、只此職分を行ふ爲に自己の販賣店を置いて之に當らしめたものである。商店主人に代ふるに會社の使用人たる販賣店主任を以てしたるに過ぎない。配給機關たる組織は依然として異なる所はない。而して大工業に於ける此種の商業代位の傾向は近世に於ける集中運動特に生産カルテル又はトラストに於て特に表はれてゐるものである。

(1) Sombart, Die Juden und das Wirtschaftsleben, S. 130 ff.

茲に於て問題となるのは從來獨立の商人のなしてゐた職分を其儘工業家が經營することによつて直ちに之が非商業となり、工業となるものであるか、殊に一商業經營を工業會社が譲り受け其儘之を自己の支店又は販賣部として經營する場合には全然商店の所有權が移轉したに過ぎないものである。販賣部なる組織は依然として存してゐる。而も尙商業でないと主張しなければならぬかと云ふことである。

學者或はかかる場合を説明して、組織は以前と同じでも此の組織を所有するものは工業家であるから、買入れた材料を其儘賣る場合とは異なる。販賣したものは販賣者の加工したものであるから商業ではないと云ふかもしれないけれどもこれは從來の定説に囚はれたか、又は法律論を弄ぶものである。商業は買入れたものに特別の加工を加へずして再賣却する行爲であることは中世教會法も既に認められた所で、又余が本論の始めに引用した J. B. Say の説又特に之を明言してゐる。けれども商業と云ふ行爲が獨立の營業として營まれるか、或は大企業内に於

て各種經營間に於ける分業の形で行はれるかと云ふことは國民經濟的組織的考察の上には全然無關係のことである。工業が商業を兼ねるともあれば、之と逆に商業が工業を兼ねる場合がある。例之家内工業に於ける元締制度は今暫らく論外に置いて、デパートメント、ストアが洋服裁縫工場を設け、原料を仕入れ出来合洋服として賣却しても此の買入、賣却は共に商業で、裁縫工場部經營は工業である。山林を立木の儘に買入れた材木商がこれを切り出して、運搬する便宜上山林所在地に數名の大工を連れ行き、木を切り枝を落し、時に又更に一步を進めて之を板になして市場に運搬するも尙商業たるを失はぬ。特にかの補助工業に於て見るやうに商業經營の一部に工場を設け原料運搬の便宜上之を適當に加工し之を賣却する場合や、又更に一步をすすめてかかる工場が特別に設けられて獨立の工業となり、商人の依頼に應じて加工をなし之に對し報酬を受くる所謂請負工業(Lohnindustrie)として存在する場合に、商人が原料品を買入れ、運搬其他の便宜上之を利用し、加工の後賣り出す場合でも商業たる點に於て相違はないものである。則ち商業を獨立せる營業として營むや、或は兼業の形式をとるか、又加工と賣却を同

一人がなすか、或は又別人がなすかは商業の本質に關する所はない。之を以て見れば今日の商業は必ずしも獨立の營業として財貨を買入れ、更に之を賣却するものゝみに限らない。此等獨立の商人の經營する國民經濟上に於ける配給組織を生産者が之を經營する場合に於ても尙之を商業と稱するを妨げないものである。其他生産方面に於ける所謂商業代位運動の中で購入組織に於ける獨立商人に代らんとする小生産者の販賣組合運動も必竟獨立の商人の地位を廢除せんとするものであつて購入組織上の職分を除かんとするものでない。否彼等は此の職分を承繼する爲に特種の組織を造つたものに外ならぬ。

消費組合運動は抑々一八四四年も末に迫つた十二月の或る夕刻、英國 Rochdale の Toad Street 五十八人の社會主義的思想を有する人々によつて開かれた And Wayvers Shop に始まるものであるが、爾來此の運動は非常の勢を以て各國に擴つて現在英國では二百萬の組合員を有してゐる。其他自耳義に於て此の組合は特に非常の發達をなし、今や此の消費組合は現代の資本主義的生産分配の方法を打破して、之を共同經濟的社會主義的に改造する第一階段であるとすらと考へらる

に到つた。(1)

(1) S. mbart, Sozialismus und soziale Bewegung, Neunde A.H. S. 214 f.

此の消費組合は原則として之を經營者の營利のために組織せられてゐるものではない、従つて從來の定説から云へば此れ亦商業と云ふことは出来ない。これと同一の例は今日大工業が其労働者に低廉なる食料品及び使用品を供給する爲めに特別の設備を設けて實費にて賣却する組織に之を見ることが出来る。此等兩者の場合にはかかる商業を營む私經濟的動因及び之を營む者の主觀的精神は營利ではない、從來の營利を求むる企業家に代ふるに、共同利益を目的として、商業利潤を目的としない組織が之に代つたものである。而も其行ふ所は正に從來の商業の行つた所で、其異なる所は企業家の利潤が動因となつて其組織が動されるのではなくて、一團の消費者の共同利益が之を動かしてゐるのである。此點に關する Schwiedland の説はよく其要を得てゐるから茲に其一部を引用する。

Der privatwirtschaftliche Beweggrund, die subjektive Seele des Handelsbetriebes, kann sich indes ändern. Sein Vorgehen bleibt ein Handel, wennauch anstelle des erwerbsuchenden Unternehmers ein

gemeinnütziges, auf Handelsgewinn verzichtendes Unternehmen tritt, wenn das Ziel der Tätigkeit bloss das Bewirken eines wohlfeilen Einkaufes für einen Kreis von Verbrauchern ist. Beim erwerbsmäßigen, gewinnsuchenden Handel erhält der Gewinn des Unternehmers – beim gemeinnützigem Handel der Nutzen eines Kreises von Abnehmern die Tätigkeit in Gang, aber das Wesen der Handelsfunktionen bleibt das gleich:

Auf dieser Stufe hört der Handel auf, Zweck eines besondern Erwerbs zu sein, wird – wie der einstige direkte Tausch zwischen den erzeugenden Wirtschaften, der sein Vorläufer war – wieder eine Funktion sozialer Organismen zu deren besserem Bestande. (1)

(1) Dr. Handel; 1918, S. 9-10.

之を以て見れば商業的利潤を求むることも亦今日の商業の要素ではない。消費組合の如き只從來の營利商人によりて行はれたる配給組織其儘を組合員が共同經濟的利益の爲めに經營するもので、此れ又經營所有者の移轉に外ならぬ。其本質は依然として財貨配給を其の専務とする組織である。

國家が財政上の必要、又は社會政策上より行ふ獨占商業及び食料品商業の如き

之れ亦從來商人の行ひたる組織を國家自から行ふもので、其國民經濟上に於ける配給職分を盡くす獨立の組織たる點に於て何等異なるものあるを見ない。(二)

(一) Max Weber は消費組合を商業と見ないが國家の商業は之を商業であると云つてゐる。Max Weber, Die Wirtschaft und die gesellschaftlichen Ordnungen und Mächte, (Grundriss der Sozialökonomik, III Abt., I Teil S. 90.)

七

國民經濟上に於ける配給組織に斯の如き大改造の行はれつゝある時に吾人は最早利潤を得る目的及び獨立の營業たることを要件とする古き商業の概念に關する定説に満足することは出来ない。

現今分業の必要上から生産者と消費者とは非常に距てられ且つ配給過程の專業化は益々此の距離を遠ざからしめた、今若し現在の社會生産力を維持する爲に分業の制度が技術上必要であるとするならば、古の自足經濟又は直接交換の經濟に復舊するとは絶對的に不可能と云はなければならぬ。既に此のとが不可能ならば此の距てられたる生産者と消費者を結びつくる特種の經濟機關の存在を要

するは當然である。今日の經濟社會にかゝる職分を盡くし得る經濟的施設を求めて吾人は茲に組織なる概念に到達する。蓋し今日分業によりて各人がそれぞれ經濟的活動をなす場合に吾人は其必要とする財貨を何時たりと雖も容易に手にし得る設備を要する。只偶然的に活動するものにこれを依頼することは出来ない。則ち専ら財貨の人的移轉配給を任務とする専門的の組織がなくてはならぬ。此組織が營利の原則によつて行はれてゐると、一部分の人々の共同利益のためには經營せられてゐると、將た又獨立の商人に屬すると、工業家自から經營すること其所有權の所在は問ふ所でない。要は吾人が必要とする財貨を何時と雖も容易に吾人の手許に供給してくれる設備でなくてはならぬ。則ち之を目的として常に活動する組織を必要とするものである。則ち商業とは人の間に於ける財貨の移轉を司る組織を云ふものである。(二) 此故に生産者が偶然的に行ひて、かの特別の組織をなしてゐない販賣、又消費者の簡單なる使用品買入行爲は商業ではない。商業たる爲めに財貨の移轉を司ることを目的とする系統的永續的規則的の組織たることを要するものである。而して只規則的に活動してゐるかかかる組織たれ

ば足りる。此の組織が何人に屬するや、營利の動因によつて活動してゐるか否かは問はないものである。

(一) 商業を此の組織の意味に初めて解釋したのは余の知る限りに於て Buri で、次で Hirsch が一九一五年 Grundriss der Sozialökonomik 中の一部 Organisation und Formen des Handels und der staatlichen Binnenhandelspolitik に此説を承り繼いだものである。最近では Philippovich の Grundriss der politischen Ökonomie の政策編を Summary が昨年其第十版を出すに際して舊定義を棄て、而して此の新定義を少しく訂正して採用してゐる。

以上の諸學者が組織を如何に解釋し、從來の商業の概念を如何なる程度迄擴張せんとするものであるかは、只其定義丈では明かでないけれども、余自身は商業を以上の如く解釋せんとするものである。

茲に於てか商業は直接交換時代には行爲概念として解釋し、資本主義時代には之を營利的、私經濟的、所有權的、系統的、人的職業的概念として解釋し、高度資本主義社會的特徴ある今日の經濟組織の下では之を社會經濟的、系統的、職分的、組織的概念として解釋し、解釋す可きものであると信ずる。經濟組織の急變しつゝある際にいつまでも從來の古き定説に囚はるゝは余の採らない所である。 (終)

社會主義と國家 (二)

小泉 信三

(五)

上記哲學の貧困及び共産黨宣言の中に、階級別の廢止せられた曉に於ては、眞の政治的權力なるものは最早なくなるであらう。「公的權力 die öffentliche Gewalt は其政治的性質を喪失する」と謂つて居るのは果してどれ程の事を意味するかと云ふに、Mark-Engels の意が縱令「政治的權力」と國家其者とを同一視するに至らぬまでも、前者が後者の本質に缺くべからざる要素であつて、政治的權力のないところには國家も亦存せぬと謂ふに歸着することは、二者の此時以後の諸著作に徴して明かに之を知ることが出来る。(就中一八七三年 Engels が伊太利の一社會主義雜誌に寄稿して無政府主義者の説を駁した文の一節に「凡べての社會主義者は、將來の社會的革命的結果として、國家、並に國家と共に政治的權威 die politische Autorität が消滅